

## 日本がん疫学研究会

## 介入研究

発生要因の研究が疫学の核心にあるだけに、Prospective study が甚だ乏しいことは淋しいかぎりである。人間集団を母集団とする研究では、研究対象を at random に選んだり、試験群と対照群に区分し、研究の具体的な内容を知らせることなく何年にもわたって観察をつづけることはさまざまな困難がある。とくに現今の日本国民の通念を考えると不可能に近いものかもしれない。

最近英国で、禁煙率の異なる2つの集団について人為的な操作も最小限にし追跡した介入研究が発表されている。こうした研究でのデータ解釈は単純にはゆかないが、まさに疫学者の腕のみせ所であろう。倫理という言葉をもち出さなくても常識で許される可能な手段を用いて介入研究を実施することが必要な時期と思われる。人間を対象とする研究は実験医学とは全く比較できない諸種の問題があるが、それだけに新しい道もあるわけである。

## 第7回日本がん疫学研究会開かる

昭和59年6月22日 仙台市・戦災復興記念館  
会長 東北大学教授 久道 茂

〔主なプログラム〕 〈特別講演〉 癌化と癌死——がん予防を考える——（東北大名誉教授・佐藤春郎）  
〈Round table discussion〉 がんの一次予防と二次予防の問題点（司会 国立がんセンター病院長 市川平三郎）

〔ハイライト〕 今回は、がんの一次予防と二次予防を主題として、研究発表および Round table discussion が行われた。Round table discussion では、がんの一次予防（発生の予防）と二次予防（早期発見）について、6人（大島明・大阪府立成人病センター、重松俊夫・福岡大学医学部、富永祐民・愛知県がんセンター、中原俊隆・厚生省公衆衛生局、平山雄・国立がんセンター、久道茂・東北大学医学部）の演者間で定義を確認した後、日本のがん対策の現状についての分析と将来の方向についての意見が交換された。これまでのがん対策が二次予防中心だったことは全演者の認めるところであり、その理由に、がんの原因究明が不十分であったこと等があげられた。一方、喫煙対策のように、早急に手を打つべきものもあることが強調された。共通の考えとして、今後、一次予防と二次予防の利点、欠点を十分把握し、それぞれの特長を生かして、両者をうまくかみ合わせた方法対策を推進すべきであるとの方向が打ち出された。（清水弘之）

## WHO胃ガン国際情報センター総会の概要

表記の国際集会在1984年7月26-28日、東京の国立がんセンターに於いて開催された。

冒頭、WHO 西太平洋地域の中島事務局長は、胃ガンは世界で年間68万人が罹患し、ガンの中で最も頻度が高く、とくに日本、韓国、中国などに、ソ連、南米と並んで多いことを強調、中曽根首相のメッセージ（大池局長代読）では10年戦略が紹介された。

杉村国立がんセンター総長は胃ガンの一次予防の必要性を主張、そのための研究が急務とした。

本題に入り、まず、1970年発足以来、胃ガン情報センターの活動の歴史が市川院長から報告された。事業として実施された訓練コースや、モノグラフ、ニュースレターの発行等々の研究が紹介された。

各国のレポートにうつり、チリ、コロンビア、チェコスロバキア、エジプト、西独、英国、ハンガリー、イタリア、韓国、ナイジェリア、中国、フィリピン、米国、ソ連、の代表によりそれぞれの国の胃ガンの現状と対策の問題点が紹介された。

疫学面としては、エジプトのオマール博士は、胃ガン低リスク国のエジプト、米国と、胃ガン高リスク国の日本との食生活を比較して、日本では、果物、牛乳の消費が少なく、魚介類、種実類、豆類の消費が高いことに注目した。イタリアーではマリノ地区に胃ガンが多く、ヨーロッパ中最高で、クレスピ博士はここで食生活、萎縮性胃炎、胃液中及び尿中のナイトロプロリン測定などを中心とした疫学調査を行うと発表した。

中国では、年間16万人が胃ガンで死亡し、地域的に死亡率に15倍以上の差があること、その差が慢性胃炎、胃液中の亜硝酸塩、食物中のカビ毒などと平行することを発表した。

次に、項目別検討にうつり、(1)出版、(2)登録、(3)病理、(4)診断、(5)治療、(6)原因、(7)集団検診、(8)疫学の各項目に亘って、掘り下げた討議が行われた。中でも、胃ガンの前ガン病変研究の進歩、内視鏡集検の可能性、胃ガンの発ガン遺伝子の新しい研究などに論議が集中した。とくに病理サイドからは、ミング博士から胃ガンの前ガン病変として、化生と別に、異形成 (dysplasia) に注目すべきことが強調された。

勧告としては、(1)訓練コースの計画、(2)胃ガン登録の標準化、(3)胃ガンの1次予防、(4)病理分類の標準化、(5)胃ガン治療の評価、(6)治療をうけた患者の「価値ある人生」の考慮などが提案され、それぞれ慎重にしかも前向きに検討していくべきことに意見が一致した。（平山 雄）

## 日蘭前立腺がん症例対照研究

この研究は京都大学泌尿器科学教室（吉田修教授、岡田謙一郎講師、大石賢二助手）とエラスムス大学泌尿器科学教室（F.Schröder 教授）とで行なわれている（IARC が一部資金援助している）。疫学担当は名市大・大野、エラスムス大学 R.Hayes である。

以下この研究の概要を記す。(1)目的：日蘭両国の生活様式の差異と類似性の中から、前立腺がん（潜在がんも含め）の発生要因の解明である。特に潜在がんの発生要因（Initiation factors）、潜在がんから顕在がんへの発生要因（Promotion factors）の解明である。(2)研究形態：症例対照疫学研究、病理学的研究、血液生化学的研究の3本立である。疫学研究については後述するが、病理学的研究は標本の切り方・観察方法の標準化ののち、特に前立腺がん・潜在がん・前立腺肥大症の病理像、潜在がんの頻度などを両国間で比較検討する。血液生化学的研究は両国の血液資料を同一検査施設で分析し、性ホルモン・性ホルモン結合グロブリン（SHBG）、血清ビタミン類（レチノール、βカロチンなど）、血清微量元素（セレン、カドミウム、亜鉛など）などを比較検討し、かつ疫学調査資料としても分析する。(3)日本における疫学調査研究は、(i)研究地域：京都市とその近郊6市である。(ii)症例と対照：京大泌尿器科とその関連12病院泌尿器科の顕在前立腺がん初診入院患者、（症例Ⅰ）。前立腺肥大症患者の摘出前立腺の病理検索にて発見された潜在（局在）前立腺がん患者（症例Ⅱ）。この病理検索で潜在がんであるが、浸潤性のもは症例Ⅰに加える。前立腺肥大症患者で病理検索により前立腺がん（潜在がん）が否定された患者（症例Ⅲ）の3群が症例群である。対照はその他の

癌・肝疾患・ホルモン異常がなく、症例ⅠとⅢに対して、年齢（±3才）、入院期日（±3ヵ月）、受診病院の3項目をマッチさせた、泌尿器科およびその他の科の入院患者である。この病院対照はすべて直腸診にて前立腺肥大や癌のないものである。症例と対照は1：1の対応で、各々100例ずつである。(iii)調査期間：1981年12月～1984年12月（オランダは1年遅れて始まっている）。(iv)調査方法：出生地・年月日、教育などの疫学基本項目と食餌・生活習慣などは1名の泌尿器科医による直接面接聞きとり調査、性生活・性行動については自記式調査、食餌栄養調査は専門の栄養士1名がこれに当り、通常（発病5年前からの）食餌（朝昼夕食）パターン・摂取食品の種類と量を詳細に聞きとり、その資料と四訂成分表から1日当り摂取栄養素の種類と量を算出するという新しい調査方法を試みた。(4)中間分析結果：症例ⅠとⅢ、対照の各55名のTripletsの分析から、前立腺がん患者の疫学特性は、(i)高学歴、(ii)早朝ぼっ起なし、(iii)50才代の性交渉時の満足感不良、(iv)今までに陰萎の経験なし、(v)避妊具（コンドーム）の使用経験なし、などがリスク上昇要因として指摘された。一方(vi)女性に対する性的興味が遅い（20才以上）、(vii)食餌中のβカロチンの多いことがリスクを低下させることが認められた。(viii)オランダと日本との比較で、両国間に血中テストステロンレベルやSHBGに統計的な差をみとめていない。

以上が研究概要と中間結果であるが、今後症例対照の調査完了とともに、詳細な分析と多変量解析も行う予定である。（文責：大野 良之）

## ホンコンにおける中国人女性肺癌の特徴と成因に関する海外調査計画

文部省の海外学術調査——がん特別調査の一環として、昭和59年度から3年計画でホンコンの中国人女性の肺癌の特徴と成因を明らかにするための日本—ホンコン協力研究が行われることになった。

ホンコンをはじめ、中国東南部在住または出身の中国人女性では、どのような理由によるのか、女性の肺癌が高率にみられている。中国人女性の肺癌の成因を明らかにするために、すでにホンコンの研究者により患者—対照研究が行われているが、喫煙を除いてその成因は明らかにされていない。そのために、今回、日本とホンコンの疫学者、病理学者、生化学者が協力して、ホンコンの女性肺癌の疫学的、病理学的特徴を明らかにするとともに、ホンコン女性の室内汚染、受動喫煙などの暴露を尿中ハイドロキシプロリンの排泄量を指標として客観的、定量的に測定し、さらには中国人女性の肺癌の成因を明らかにするための疫学的調査を行うこととなった。現在、ホンコン側の研究者と具体的に研究目的、研究方法などについて事前交渉を行っているところである。昭和60年1月下旬に日本側研究者がホンコンを訪問し、現地で研究の打合せを行ない調査を開始する予定である。日本側とホンコン側の研究者は次のとおりである。（富永祐民）

- 日本側：○富永祐民 愛知県がんセンター研究所疫学部  
土屋永寿 (財)癌研究会癌研究所病理部  
清水弘之 東北大学医学部公衆衛生学  
松本秀明 東海大学医学部公衆衛生学
  - ホンコン側：○John H.C.HO,M.D. クイーンエリザベス病院放射線・腫瘍部  
Linda C.Koo,M.D. ホンコン大学地域医療学  
Daisy Saw,M.D. クイーンエリザベス病院病理部
- 印：日本側、ホンコン側主任研究者

## Cohort StudyとMacMahon教授 と日本語訳

今年の一月に、太平洋癌登録及び疫学シンポジウムに、ハワイに出かけた時の話しである。シンポジウムがすんでホノルルにもどってきたハーバード大学のMacMahon教授とCohort Studyの日本語訳について話し合う機会があった。というのは、分析疫学のうちCase-control Studyは患者・対照研究と訳し、問題はない。しかしCohort Studyの方はCohortにピッタリ相当する日本語はない。

したがってCohort Studyは、発音をそのまま日本語のカナにおきかえて訳しているのだが、その際当然英語の発音がどうであるかが基本になる。好い機会だと思ったので、MacMahon教授に何回かあらためて発音して頂いた。そしてテープにも吹きこんでもらった。その結果はやはりコーホート研究（はカナにないのでトとする）であると思う。コウホウト、コウホート、コホート等の何れも妥当ではない。

念のためにDr. Fraumeni (National Cancer Instituteの疫学部長)にも発音してもらった。この文を書くに際し、吹きこんだテープをもう一回まわして聴いてみたが、これもやはりコーホート研究である。以前から、長年米国での経験から、コーホート研究がよいのではないかと思っていたが、改めてその裏づけを得たように思う。(廣畑富雄)

## 消化器がん研究の展望

(井口潔、菅野晴夫監修)

UICC主催のシンポジウム「Fundamentals and Clinical Aspects of Digestive Tract Tumors」は井口教授を世話人として福岡で開催される。表題の単行本はこのシンポジウムのプログラムにそって、わが国の54名の専門家に依頼してまとめ監修したもので、各専門領域の動向と学会発表内容の大部分をふくんでいる。それが学会前に単行本として発行されたことは、uniqueである。

内容は基礎と臨床部門にわかれている。基礎部門は疫学、環境発がん、発生病理、腫瘍抗原、内分泌や幹細胞と発がん、臨床部門は、X線、内視鏡診断、免疫生化学的診断での最近の進歩、各腫瘍治療の進歩と遠隔成績などが展望されている。(癌と化学療法社)

## 近刊 Cancer Mortality Statistics for Selected Sites in the World.

M. Kurihara, K. Aoki, S. Tominaga

この英文統計書は、故瀬木三雄先生の記念出版として企画されたものである。瀬木先生は栗原登らと、1950-51年から1966-67年の各2年毎6回にわたり、24ヵ国のがん死亡統計のシリーズ刊行をされたが、それを完結させる意もあって、1968年から1979年まで全く同じ様な内容を作製し、30年間15期間の統計をまとめたものである。合せてWHO Data baseからの資料をえて1978-79年の世界39ヵ国の癌死亡統計をつけ加えた。多数の図を付して一般研究者の便に供したものである。11月発行予定 (University of Nagoya Press)

## 1984年国際がん登録学会 (IACR)

本学会は1966年第24回がん学会の機会に、故瀬木三雄教授の提唱で始められ、以後2年毎に世界のどこかで開催されている。本年は福岡で重松俊夫教授の世話で、昭和59年9月27-29日の3日間、福岡のガーデンパレスで開催された。その主なプログラムは下記の如くであった。

### 第1日目

#### BUSINESS MEETING

Activities of the IARC Dr. C. S. Muir

#### SPECIAL REPORT

Report of the Heidelberg Meeting Dr. G. Wagner

#### KEYNOTE ADDRESS

Dr. J. Clemmesen

#### SPECIAL PRESENTATION

Population-based Cancer Registry in Japan. Dr. S. Fukuma

#### CANCER REGISTRATION IN VARIOUS COUNTRIES (I)

Cancer Registration in the U. S. A. Dr. J. L. Young

" in the U. K. Mr. R. G. Skeet

" in the U. S. S. R. Dr. N. Napalkov

" in Canada Dr. E. A. Clarke

#### CANCER REGISTRATION IN VARIOUS COUNTRIES (II)

Cancer Registration in Australia Dr. J. M. Ford

" in China Dr. Jin Fan

" in Hungary Dr. S. Eckhardt

" in India Dr. Sanghvi

#### THE ROLE OF CANCER REGISTRY IN SCREENING PROGRAMME

The Linkage of Mass Screening Data with the Cancer Registry Dr. S. Hisamichi

The Role of a Population-based Cancer Registry in Monitoring and Evaluating Cancer Screening Programs

Dr. A. Oshima

Trend in Cancer of the Cervix Uteri in Various Parts of Denmark in Relation to Smear-taking Activities

Dr. O. M. Jensen

その他一般演題5題

### 第2日目

#### THE ROLE OF CANCER REGISTRY IN CANCER CONTROL PROGRAMME

How a Cancer Registry Can Give Vital Data to Assist Some Aspects of Cancer

Control Program Dr. T.P.Maramba

The Cancer Registry in Cancer Control in Osaka, Japan

Dr. I. Fujimoto

The Role of Cancer Registry in the estimation of Survival

Dr. J. L. Young

#### ROLE OF CANCER REGISTRY IN AETIOLOGICAL STUDIES

The Cancer Registry As a Tool to Detect

Industrial Risks Dr. O. M. Jensen

An Analysis on Geographic Variation of

Lung Cancer Incidence in Japan Dr. M. Murata

Uses of Histological Data in the

Population-based Cancer Registry Miss A. Hanai

その他一般演題11題

### 第3日目

#### ROUND TABLE DISCUSSION "PROBLEMS IN CANCER REGISTRATION"

Completeness of coverage Mr. R. G. Skeet

Funds and Staffing Dr. T. Shigematsu

Follow-Up Mrs. C. Percy

Confidentiality Dr. C. S. Muir

その他一般演題8題

多数御参加下さい

THE SECOND UICC CONFERENCE ON CANCER PREVENTION  
IN DEVELOPING COUNTRIES

KUWAIT, DECEMBER 1-4, 1984

Saturday, December 1, 1984

18:00 Opening Ceremony

Special Presentations

1. The Cancer Problem in the Gulf States Dr. Y. T. Omar
2. Cancer a Preventable Disease

Welcome party

Sunday, December 2, 1984

Trends in Cancer Incidence (Morbidity & Mortality)

Asia Middle East Africa Central & South America Others

Epidemiology & Risk Factors of the Following Sites of Cancer

- |                |                |                    |                  |
|----------------|----------------|--------------------|------------------|
| 1. Oral Cavity | 4. Liver       | 7. Breast          | 10. Thyroid      |
| 2. Oesophagus  | 5. Nasopharynx | 8. Cervix          | 11. Malignant L. |
| 3. Stomach     | 6. Lung        | 9. Urinary Bladder |                  |

Epidemiology & Risk Factors of Cancer Sites (continuation) Session

Monday, December 3, 1984

Special Lectures

1. Barriers of smoking control programs. How to overcome ?
2. Nutrition, dietary habits and cancer.
3. Hormone and cancer.

Primary prevention in Developing Countries, at Present and near Future, for the Following Sites of Cancer:

1. Oral cavity
2. Oesophagus
3. Stomach
4. Liver
5. Nasopharynx
6. Lung
7. Breast
8. Cervix
9. Urinary Bladder

Early Detection of Cancer in Developing Countries,

efficacy and perspectives, (for the above mentioned sites)

Tuesday, December 4, 1984

Underlying Concepts of Cancer Control Strategies

in Developing Countries.

1. Guidelines of cancer prevention.
2. Can cancer prevention be implemented in Developing countries ? At what level can prevention be practical and efficient.

Special presentations

1. Training specialists in cancer control programs in Developing countries.
2. Contribution of cancer research to cancer control in Developing countries.
3. Immuno-deficiency and cancer.
4. Diagnostic techniques and its impact in cancer control in Developing countries.

Prevention of Cancer Deaths in Developing Countries

1. Special presentation
2. Panel discussion on therapeutic modalities  
Surgery Radiotherapy Chemotherapy Biological Therapy Rehabilitation

Closing Remarks

Language: Official language is English. Simultaneous interpretation is not available.

**REGISTRATION**

All those planning to attend the conference and their accompanying persons are requested to register in advance

Registration Fees :  
Regular member \$ 30 (30 U.S.Dollar)  
Associate member \$ 15  
Kuwait member K.D 10

日本がん疫学研究会

事務局 〒464 名古屋市千種区田代町

TEL 052-762-6111

編集責任者

愛知県がんセンター疫学部 気付 振替口座 名古屋1-37001

青木 国雄